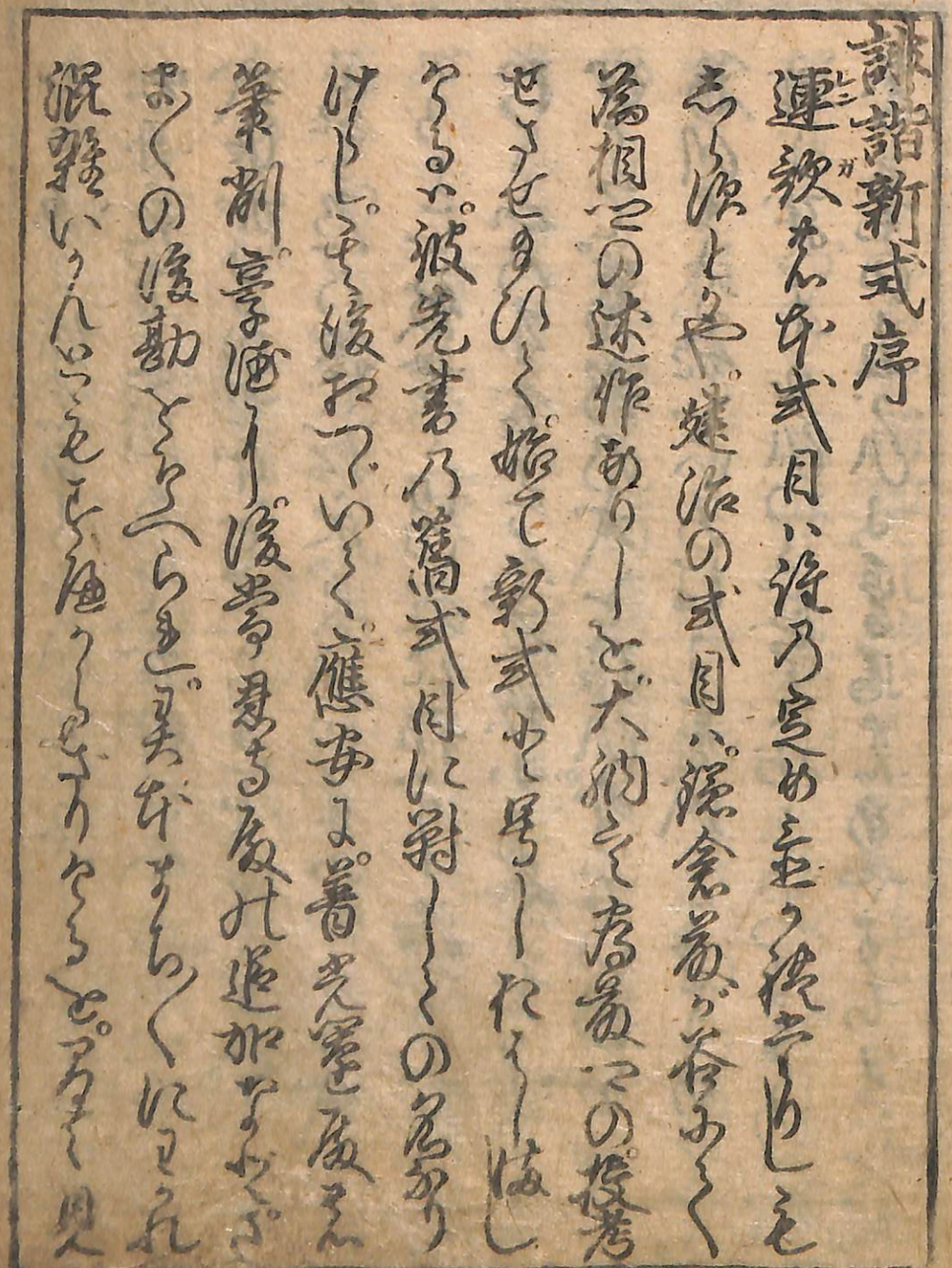
911.3
八



五つ之内





諸諸新式序

運歌（レンガ）ハ本式目ハ後乃定め玉ヘ給ふしを
ふる源とかや。建治の式目ハ総会前が答ふ
為相への述作ありしを大納言為家への投考
せさせまひく始て新式ハ号しれるし後し
なるハ彼先書乃舊式目に對しての名なり
けれど其後おつゞいく應安ハ普光室殿ハ
筆削享徳ハ後當是ハ殿ハ追加なれば
おくの後勘とかへらまゝ其本すらくにまれ
混雑いかんいつも正通りしまゝなるを見

出る毎に後にあらそひをいでしとして。さて此に
牡丹花道遠流反也。合稱の今案に。今此新
式追加等の世代を定らまゝなるとなん。そこ
家が尾乃掟ハ。松永貞徳のまゝに出てる式にて。
あらとを彼世々の出歌に招ぶし給へり。一歌に云。
おく山乃木食上人。まゝ歌に多やとうらしめ
むとて。舊新乃式を指ひ。今古の格を正し
あれめく。歌をいろはにまゝ流こ才にあてく。
世に弟しまひつる。無云抄といつるものゝ。松
分毫の毎がひに。雪馬にあやまちすこと傷

笑しく。名を滑稽に。俗に寄せ。法を新式に
歌に寄づけて。此後まゝ雜にしてと歌。好す物の
杖とも柱ともなすまゝとなん。始く枝折乃道世を
捨てしよさ。家が尾の奥深いくだく月いくだく
としかいつすを知らず。嚏（ハナヒ） 毛吹 狗子（エノコ） 山井等
此いかしへの文字ハ。松かのいかしへ乃尾をもつて。今の
俗をあらくにませばや乃ふべしふく。筑波淺香
山の古此をかのもさへ。おろく羽孫入しこゝ人
にすこざ歌ハ。俗にもいひ出める云の紫をかかれ
ばそれがつすいさらにもいりし。此ちかれ回とせ

誹諧新式目錄

誹諧之道家の書ノ四字五義 今稿 一丁メ
句と求ふの用捨 并立圓説 六丁メ
又義ハ口変 古傳授之引言 十五丁メ
六義 詳論 諸家口変引言引句 十七丁メ
四季詞 得に用紀熟字 付おかし 九七丁メ
二月の詞 年中行事 [illegible] 廿五丁メ
三月の詞 日 廿七丁メ
四月の詞 日 四十二丁メ
五月の詞 日 四十五丁メ

六月の詞 日 四十八丁メ
七月の詞 日 五十三丁メ
八月の詞 日 五十七丁メ
九月の詞 日 六十一丁メ
十月の詞 日 六十五丁メ
十一月の詞 日 六十七丁メ
十二月の詞 日 六十九丁メ
加字乃説 今按 并合數引句 七十二丁メ
神祇の詞 尺度の詞 増字 七十八丁メ
恵まん詞 日 七十九丁メ

述懷の詞 日 懷舊の詞 今按 八十丁メ
衰傷 今按 玉帯 増字 人倫詞 日 同丁
那人倫 日 勅ふ 日 八十一丁メ
那勅ふの詞 日 八十二丁メ
編ふ文解あるまゝ 勅の紹き紙 引句ホ 同丁
第三の仕様 き誹引句 八十四丁メ
句作まん 苦惱 てふとハ口変 八十五丁メ
言てふは んとうつれてふは
かすりけてふハ おくりのんとする
言のこころとする 言乃詞とする

あるのん紙とる

去きしひ相よせ　婚字　い　九十二丁メ

ろ　はの相まんち　九十四丁メ

にの字れち　九十八丁メ

ほ乃字　九十九丁メ

への字　百丁メ

とまん字　百一丁メ

ちの字　百二丁メ

りぬ乃字　百三丁メ

るとの字　百四丁メ

わの字　百五丁メ

か乃字　百六丁メ

よの字　百九丁メ

たの字　百十丁メ

れ乃字　百十二丁メ

その字　同丁

つの字　百十四丁メ

ねまん字　百十五丁メ

なの字　百十七丁メ

らの字　百十八丁メ

むの字	百十九丁メ
う乃字	百廿丁メ
ぬの字	百廿一丁メ
のれ字	百廿二丁メ
れの字	同
くの字	百廿三丁メ
やの字	百廿五丁メ
まの字	百廿六丁メ
け乃字	百廿七丁メ
ふの字	百廿八丁メ

この字	百廿丁メ
にてあの字	百廿二丁メ
さの字	百廿六丁メ
きの字	百廿八丁メ
ゆの字	百廿九丁メ
め乃字	百四十一丁メ
みの字	百四十二丁メ
しの字	百四十三丁メ
ゑひ乃字	百四十六丁メ
もの字	百四十八丁メ

世の字　百四十九丁
寸乃字　百六十丁
淫和之淫按要　引白平仄付器式　百五十二丁
入聲字者畧　今按　百五十八丁
淫和の小式　同上也　對白式　百六十五丁
停銀落銀乃弁　百六十七丁
新義四十種
和歌乃ことんよせ　百七十三丁
以上八十五ヶ條

凡例

一 此書そしゝ先に誹諧の四字義を出すは世に
なきにしに業乃終し玉篇和字彙等の
端に見わしく誹なん音ハイなしぬるを義に
あり了角の童蒙ら不見の覺来かさにこと
とふく恥く人篇と用ひ其名に智能を
の文多し此ゆへし先師貞徳立圃乃ん服
とりく陸分の愛見と記し此道なん奥
秘訣能し結ぶ後学ことに倣く言葉
にしてこゝろへき謂と示せ

一 匂と米の用捨并ぬ義六義の説は今會奥得
の口決といへども此乃好士知らしく省へ
ならば前板よせられ手かゝんまゝひおり
粗しるし常ならといへども粗いまゝ難説
然へば此ひ一家の秘文と渡しく後学
乃亀鑑とは

一 田季なん詞よせ旧本は四月より十二月ニ
二千八百十ヶ条之ことを補ふる浮和なん
熟字乃季に用ふ異名のたくひ又百
二ヶ条をくすへ合しく二千二百十二ヶ条と

なし粗又季の詞に初んの条へがたるの
ある地は諸書に考へくその下に和語の注釈
を加ふるその百十二ヶ条をいへくすし

一 世本おかく切字とよふしく古語と詞かは
季の詞よせはれくに並べく縦令乃追考
れごとし愚按は孫らば先部とはく句と求
腐ふのぞみく字と孫らんは前附の京地
時候乃連連季の詞とはるにあらはて
何ふ寄てか蒙むや思ふり先大ふ垂直
き地之今此例ふ解く詞は切字と此れ

これをふくらませ書ける紙ばくく句と記し句をば
く切字をと定むべきの微をなり
一切字の估ふべきいわれありく估ふの中強を知る
にはあらず哉と句のふところにやの乃
字の乃ふところくよりや主人ありて又一向に
切字なしの句をくく初つ乃年と題するにあり
先哲乃授文とするにふれざることや
近来と称しまゝつゝ今世云切字を
今按に模字くく大概を示し切字哉也
なり等の切字なけれ ば乃下知の
一非紙数ホの句を十一ケ条非人非狀非
急非述懐非花非月非雪非釈非遍非
ろ遍ホの歌並に家門乃美表紙水彩他
表紙のごとく今は書彼例よりこゝにこれを
除く他ふの面よりふいわれはなし
書されど又述懐と懐旧と春陽なる書
そいふ一つふようなるひとつよ

四書にて代あらしにまたちとく各四つかし
増字ありて悪く消へ半に舊本二百七
十三新増百五十五字合又百廿五字
一 編乃又稱牙二稱てふと等の説は嫡少路反
偽宗雅紹巴易稼ホ乃愛明とかくまた桃の
引句に紫と志らしむ
一 去姫の沙汰は此頃乃先哲殊し無きし代
くかん述作あれしといへども桃中松永貞徳
四葉偽文のこゝろかつ冬考ありて筐中
に秘せられし黄表紙 新号未考世 名以傘追考 と御とし

補ふに和学抄 江戸通え 極 西民 嚔 立圃 同大全
同 同綱同 同 西霧 一書 仕屋 元隣 合学 一書
世語焼 立和 物子 立和 徳万葉 立圃 乳母偽
母 立和 明鏡 立圃 偽紅 佐聖 紅 立徳 如是
宝珠 安藤 施屑 風俗草 隆 綱寄 立圃 被中
記 家偽 不拘 維 永随筆 同 以傘 西民 補 同 元隣 家
書 同 古今 連珠 同 風俗 同 追加 埋木 笑の説
古とかくに 但近年板行ある書近ところは 相立 まと
まし 小以 陸明鏡 手松明 まり 火斯
糸屑ホのこゝろいい説とにる 四代いより寸と 詞数
に宜先 拾とく 不用 もし
子九百八十六字新増の詞七百四十一合とく

二千七百一えいろはの[illegible]にしたがひて[illegible]也

一和(シヨ)んの意(オウ)[illegible]しくしたやとしらしたかんなめ

一つくの下に丁数(テフカス)を記(シル)し[illegible]口(クチ)の目(モクトク)の

下(シタ)に考合(カンガヘアハセ)く求(モト)めい[illegible](カケ)乃てもちに意(オウ)にる

かとくなるん

誹諧新式目

誹諧之連歌かく書る

誹ハ敷尾切音斐(フヒ)なり誹謗(ハウ)乃誹(ヒ)なり譏(ソシ)なり又

俳ハ歩皆切音牌(ハイ)と註(チウ)し俳優(ハイ)ハ雑戯(リウ)をいひ

て[illegible]ことを多くいふ也訓を夫誹諧の二字ハ

史記(シキ)なり滑稽(コツケイ)に準(レン)しくその趣弁舌利口あるを

もの言諧(コン)乃とし火とも[illegible]にいひなれしや

清輔の奥義(ヲフキ)抄にも書(カ)もまし誹諧乃字ハ

ここかく讀(ヨム)しなとも[illegible]ハ則(ヌチ)誹諧といふ事

談笑乃二字に通ふまゝ理あきらけし然らはいへ
いれ誹の字と書むし言从非はあしれまゝ只我
度を非乃人に並ふと用ゐへしといふ説あり又ある
説に誹諧の誹し言篇と書て字義に付く
ふ紀口偽なれはしをあらはれて牌の音なしかあり
なから紀氏を古今集に書りへ新に相志ぬくいふ
いふしへの抄物を見新に為るへは法苑經と書くに
クエキヤウかを假名と付てる者有り只ゆへ事かのみ
いふ為紀とおクエと点を付てる事二重假名といふ
物を久恵切計なまいむしは角も付なると見へさ

なまいまのみなしは婚命なまいふ色きをやうてクヰ
メウかを点してるをあり此又神書し舎人親王の
蹵敬と註しく此云俱穢鼓羅々箇須かあるさ
まいは蹵を易事はケと云ふまいは是ある二重うんな
なり今此誹の字もそれ新とはく点を付てる歟
已云愚按し云在二重假名かをいふ色し彼以切
比なまいは真理あるし然ても志ゆ様かを華と
点をへ紀とクエと付婚とすへきをクヰと付るを
字にしかりてあひもまとよし相なのまゝなりし
閑合のつかひ屈すれくやうてケともきともなゆ

ふまれば誹の字ハ志かと反切しく見さまハ斐の
音と知るまさるも又あるふ人の口傳し他の國乃
書ハ高名乃字衍と声音におかく乃義を含
蓄しく同し文字といへとも用ふ所ことなり
異訓異義をあるまれ家ハ國ハ神代よりすと
しせいふ文字とて知りしるふ人もなき紀能名
乃四十七音のミ事也此今ふありて古く万葉ハ
なと彼國の文字ハ和諸の訓とかくなん
音声をさせ作しむるすに成りぬまとそ
も世くすりて乃今此訓とたくらふまハむかし

の詞ハ今ふくしく覚ゆるをありそまハ中ふもいせ
ん見ゆるぬ点ありくいふ事也多くしく和を又
おかりの多くハ萬葉ハ喚犬追馬鏡と書くとそ
ゆく見とよませ將播良也書くいふとんといふ訓ひ
ゆるを又神書乃注ふとふを惣して字義にかくし
ふ為ふ所のしをあまハ志ゆく字義を本也
をへ知ふをあらはさりとて訓と字義を用ひさ
ふふを有さるまれむかしより通正字別正字全義
讀字義法ふかくいふ名目なれかしをあらはし畢
竟をいかいの二字ハ訓ふよりて義をはる義ハよ

つまく字を求めて此ゆへし声
を聞ゆ候て字は斐を用ゆるの説先師立圃
の袖中記ゆへしるものにあり有此つゆく云ふ
き説をあまと子家のこゝろ書をしし侍
可交師侍
諧を和なり合なりや故しく歌ひくとをかゝる
よみなり然は則誹諧の二字は此史記の優孟の談
笑諷諫等のんに類して弁舌利口あれをの
火とをいひしなし多ふことにいへとも君
子の大道にかゝふ所に人をとして和悦せしむる

の端になる乃んそさありそく只さいかいそたとふ
ぞ家かなしんはるはあしれるや其家の口説
にも誹諧とは狂哥といふ也んはるとうにて侍
ゆへし小説のさまたけまて玉拙とせしぬなるへし
元物あけは侍ましともんはかゝる時を侍へ也かや
又古今の大すけしまく公任には此度の問さ
まひしかとも終に秘してしられと答ひさまつ
家は引まひ也さまは誹諧の名なる一文に和の
尼入道になりしと因光大師法然上人乃易行此義に
玉ゆしく哥連歌にも海さりて人に益あるこや

く章をなすに及ぶ此をいふ者のこと言にして詠をし
風月の流光に接ゆ裏に催諧乃あさとうなる
を述ぶへとも裏に無常迅速の世なんありさ毎をしる
めしその程に合ひ古人字を制せる不識にくりしく
先哲字を用ゐるのなりて知さうひなてもよくく玩味
をへきこすなりけし
歌は柯なり枝なり又哥の字を用ゐるもくるしかれ字まに奇
は古の歌の字と云ふ語の藝文志に哥
永言从二可長引其声以誦之也と説文に歌は詠也長引
ありしかれこの乃字を用ゐる可しと知へし
其声以詠之也なり詠しく毎とへ人の声をのべ吟詠
をなす程の事の技業ありしかしふんとへもを

毎に師説は此事にあるを古今乃先にすべきを思ふる所
に書をもしつ侍ふ也
句を求る乃用於
おもて句を設る の用於のしすまかえよせ此れ事
なるに反くにめ行くしを又く再釈しく乃
侍へしそれ句を棄と知に大切乃なりけり先和
の程は淺きより深きに棄し入自し已達の後はまた
深きより淺きに棄し出自し是を浮来深摩
乃志るしに終て探り得て侍る初んの何ものふ
これんを棄ましに成ていまゝ常のこすをしてふ

仕かけせしてとるれかたと聚しまはれば狂きかし弱
ゆへにあらぬうへ聚しなしく正務とあらり仕かん
しかれば七ゆへにその紙手除にしたるかひく法者
に材出しく淺きより深きに学む入面し一切の
ことさは練摩にしたるかひくそのんつき結る之又しくに
上手ともかしてかんは深きより淺きに聚し出し也
いふなはいと常乃ん風情と仕見へし事ゆへにそんめの
らしれるやまとよりく求め聚はしつ目のすと
地猛目鎖ゆ注へてるゆへにいふそれかたと聚しまは
ことも正務とうしなれ聚しかれせつまはなりなり

又あんしはする時はそれくらな結はしてあるしかたへ
法者におちりてくるに全くまあらけなしこまたの用
ことは第一の物なるへし只月かよりて月とそれあ花す
よりて花とそれ只し同し月同し花にそれく苦思
ある兼ひ結る之人ことに上手のおそし深き句を学くに
家もなとの見かのしの出来すんとて未熟のと
そこに最聚しすんは其ハ何もつねよしかしこと
といひ出るのミの結句それのけいことうしなふその之いの
にもあとせしくなりく猥かしかし聚しへし花
角入門とよくぐつ此先達の人すあとよくく

祈申せし返答にこのいはくあましくやまく談待ま
せおしへまひしてて弟孫に見へ待ま又問うんの武人
なれ待る一度と後にみるに人数の中にてにとんなせお
わけかなく或いさしあひなせ見へしいんのもや答えうん
の事ん人あまたそ一度そのさいしを毎度に制しの、
志る無きに非をあるひいそしかく對面し又いんも志う
さるに人にやうて家知りうれに是非を弱しくて尚在
を優なしまいさしとかま待るうんそ何の境能乃人此あ
やまりにい然へくも此し又さしあひのまい能句なとにい
かい執筆の云粗を待らんさなるぬさしあひて筆

志乃あやまつに然し又宮待ちに句と形じありさしにとこ
のむ人ありいつまと是せし何まを非とせんや答云お
にさすし待るやうに筆変も強にそうしく定くにす
成へし大宗院一不親王入本れすとあそりしてるにう
待くしく書んとて筆を繕になしに書ましとも
よいくうれ白まにしそうへ一切うつく変いそに又つよ
くかんとて筆を紙につくあくあらく筆をつかひ
しへい根蓄にくさるに強くいそし次如此のすを皆れ
道邪見といはしへとかや誠にこの江洞法師にまたする
ほくや相此つなく一書の聯綿せまりすさつくにを

あらし侍らん誹諧を連歌を一座の稱つゆくさ所に
て能くもあしくも時ゆるしなんひと毎りは抑くかさしいて
毎に詞なく求めてるんなくしかかかさなん又一函
を粉骨の句なかしくは其首尾あるぬいかにやや
かにはんを侍る大きすの句といやとれかくへ付れしやとき
句つゝれてる不い又大きすにとりかしなんと薦く厚く
地文まへきてすとそ 私云和云此あひにも百そのこのなかを讀に
かゝる格をもこまや定家に以統に云百その
格とかいさてまるまくこそ侍るへしそを又大きすにかく家に秘そる
すく百そにいはん地云のとめつゝけかくさろくと讀まくしてその名
くに表逸めき半ある云のとよろんましふるこれしきとしくにとりま
せよかと云ふもの給しし後花基後なかに百そなと文を書ひとくに
以又そに沈れしてあんしらまなるまやに又そしてにそらまれてりそれそ
おもさく尚日にかりしく地云のとさらくとにまかれしと

うやこそ云にもうやうにはそつるよいましく一まきのそいういいひこかつけ
こそゆく内にかうつきもおそれもつよくもやさしくもおそれをいろくにお
ませしさらんこそおそしろくさんつゝあ詩とあまる書あつめなる
その名にきんしゆうよんとやしもおしれのありそのといろくにすち海
しえてるんとやや何の名において 絶家を同しき海にのゝ付きも
を見とありしなきらすなるよし
てゆくなとに懐紙の面をよ給しくしれそ出かつよ付にく
きらすれ多くに侍るこ若能物物則同如来と侍る種々に
誹諧もかかひぬ家家に紅竹乃感應も詩にきよし
しめつを座とも如に行へきにとい家にやし人に侍けさせ
てんとし人まるなのんあまいんくへになりていらつゝ
時うつるこ付にくれにかなりた身をとそて付かり侍らん
こそいかに粉骨しする句よりいんあんし粗付にく

さにさゐくさ七一ふい故ろ　私云故ろとはゆへありてかくいふとの
ろふ小河のつゆのかりねのくさ枕ふいもせ恋の分ゐに揚ま死の
矢ごろ哉におかしのつゆ程なふうきんくうのなかとこそ
ろ哉（ホンセリ）本歌　私云本歌とは旅ゐにおくことそうきものありあけ
の月しぼかりいたくふけしきりぎりすいとかなしの
川のつくてなくといひ注云のひゐりんといふんとそ
大白牛車のありこゐとおのろうんしさうひなをふくく雁
句二つふんのおちつくてなかのなれ句　私云八千世迄にのまを
おのひくろうをなれをんふ云のおくてこうせこうひふおろうすく
ろくのことひのうしはろうのうろうさなくふいろと仕ろうすくく
ある秋ふふ云ろうんのふいろうすくくもふ一ふ無ありくおり
ろ死し初んのふ云とろうやくくかんとふれいをんふ云のおく
ともふれをおろてろうをひし云をおくろうんとと同ふ云ふ
ふろうんとひくくろうをろうくくふ云ひふくとれふいふ又
云とろふ
ここつふいあるもやとくくしようふとおろれ句　私云白雨
ふくく
注云のふいてのふいふのふいかなれ又やとくくと分ろのろ
ろ二つふおてふくくひふ云ありふとふ云ふおろうんふ注ふ分て

只待ふふとやく分ろのふいあ句ふ云ふおろうんふ注ふ分て一ふ
句ふ用ふいろあ句ふ云ふおろうんふ注ふ分て一ふ句ふ用ふいろあ
らひろひろあくこくろうふおろうんふ注ふ分て一ふ句ふ用ふいろあ
ゐをもろ人のふ云ふおろうんふ注ふ分て一ふ句ふ用ふいろあ
ろ又名う声ろほくふおろうんふ注ふ分て一ふ句ふ用ふいろあ
ゆの花と云一句つまふおろうんふ注ふ分て一ふ句ふ用ふいろあ
又付注云ある両国墓を出来て先ふ云ふおろうんふ注ふ分て一ふ句ふ用ふいろあ
ふく常夜に九う百六十句ありくとのふおろうんふ注ふ分て一ふ句ふ用ふいろあ
四つふいふ句のふのふおろうんふ注ふ分て一ふ句ふ用ふいろあ
くいふふふ

さ中ふを一奥あるすは然し上手のてうとをアんせんい
屋をしかなる句よつとをかへつまく能すをまへしして
前の句によくなる句ハ然ましと先生も申侍をれ
ゆへあつてしき句ハ然よれとも前の句程をお句ハ
右の楣のといひ月をも称く誹諧ハ秋の夜乃をしらか
せ申出てらんじと無下のすゑ月花よんまへ句ハ然
らんやうにとしるを益なる事ハ然かくらんやうにと
おとふも敦述してありのまゝにしてハ侍らハ作者了解
をへしかふ分別のなれか人数ハいとつくすまへ
それをこゝろの句をこゝろの思惠にのこしてさんも

おやうまなれまゝ取屋し最師ハしたらひ教とうけく
月をふる自の記憶に了解せしてハ何の為ん
を有ましかまた全くあしへとをすけしして僻案ハ
ませ偏見乃判とをれハあしかるも誠に離婁ハ明も
瞬の塵をアれとかやうにて家ハうへりなりぬ
も時ハ惑ひ侍る也ハ師に逢くあしれふしを正
さまんをありて絶てすなるも此とにんつかひをへとす
句無りまとなり縦令ハ春の花秋の月なとらひ
てハ沙汰をへくもかしあるひハさしをなれハ一句の中
に季の詞二つ三つ七とひあるひそ文字のうちぬ

[illegible]

述懷しゐ可
天保[illegible]

[illegible]

天義乃[illegible]

天義につけてさ毎くの[illegible]
[illegible]
定家卿の歌[illegible]
[illegible]
に天人の[illegible]
[illegible]

あなくらし人丸いとをくらしれ赤人あとやきの猿丸

まかくれかくれは黒を よりにしたまへく 明太

是を篇序題曲流の大義といふ一字くに付て

その所まてすくなひ志るへしを寂蓮法師乃給

ふを是を用ひしまゝなるゆゑ相家にしたりく太

乃五義をかりあ侍り 世親法師を序體腰偏

流をとしへその所れ右門ホあるひは

惜流曲證題

志らぬふを称さちかりし 花かりの数さへ見ゆる

秋の夜先月

惜流支題法

なれ山乃こゝ志ハ猶の言かれいそらふを

せこのし忘いきこゆる

惜序題曲説

おそひ出るとれいの山乃いいこしいかゝ

しをあまし志しれその代

序題支曲法

あれからいはるつまんと志りし世ハ

きのふをやふを言いふりつ

紀要をもて標流支曲證をかしへまひかん

さくらちる木のしたに風はさむからなく
そらにしたしきぬ雪をかりかな
此外にいくらも侍へかきと大かた皆かゝるかたちにて
少つゝのかたりめなるもし太の内南猿にしむかし
用ゐるとかたは篇序影曲流なるもさりながらいつれ
乃祈とそしつるにはあらしを洗ふ皮肉骨の三祈より
六義六義とそなへ十祈三十祈なれとしなく乃階級
あるそ人の賢良得失とも如く拔くそえて授け交
ゆへさためなるとや夫五義のうちに伽欠羅婆阿の
大門に通し祈仏の内秘とあらしては南来乃迷

とも破し上求菩提の周縁なるもなれの理ありとや
なれ家門に冠頭詞眼心乃なひあり口傳

六義詳論

六義とは風そへうたと賦かたくうたと比なくらへ上の真とうたふ
雅なくらへ頌いはひあり長頭九六義の口傳に風
は影とあらはさはしく物をとりて偏りを稱に如し
ていふに比は物をとりてなきによりて絹に寄いふ也
真はその紙をとくなれしくらへて影の色をあらはれ
是凡比真をしれは紙くのいさかの遠かく又賦は
そのとしれなしへくあらはいふに雅にとくしもあや

詞と義と二つの義をかくかくすると義比といふ月を
をしてうさはしくあといひ花をしてをといひあく
らかるを義祈比とのこまひ垂しんとへまかひ付る
まやと人誹諧しをはくやさい
　法ゐ積初しく法とふる志をかく　貞徳
　すらひとのわかこ神や月日星　季吟
　うはさしのちいさはかるやをんかさい　鷺水
此うち義比と義祈比のをしてをへしあらはひく
志るかなくや
(真)八重清抄に真ハ多とへ奇之又云古今にはへらしに

同しやうなまことよさあと勢ありといふり蓮の法家の吹出
に多とへ奇はをへ奇にをしいるしたとハ風はかし多とへ奇
るをあらはるを雅彼体の奇はあやまれの帝をかへとうとま
てしを周えつまされくハ呂梅の奇なり　姫令ハ志かも
述懐にもそのしまをいひあらはしくされかに物しあとへ
てよめる述定家の以後真なる二つあり　蟹真帝真と
蟹真といハ今の都の志はなとよめる奇見く
　まか志はよむとをつきしありそうへの
　そ多のまさこいよみん法くにそも
又いとく節真といハ四付の形なしまさらひく真を

るすと面白くいひてるを貴與とゆへ潘輔のいへ〻正
義ハ云見今之券嫌於媚諛取善古辛以之喩今象
に與とハ毛詩ニ[illegible]とあり[illegible]といふハ彼をいへ
ことにかなしかるゝ故ニ真をたとへてこれいふ宗祇の
いへ門比與のこゝハ[illegible]のよ詫[illegible]也門にふく
かゝれ與ハ[illegible]又云比ハあらはよ與をかく
祇しるかつて不の真とたとへくにいひ出しく懐ハかれ
るゝかむへきてすなはとあらはよいひしてあとへ
とりくいふ嫌於媚諛也人を悪ハかむへきすを
つゝへるに似てるとくしかれ[illegible]の先儒ハこれ真の

宗と側声とはたとふるんも宋儒ハ平声とは起と
うちも不経ことなるとおこはといふもたとふるんあらは
のうすなるハ畢竟同ことも[illegible]の[illegible]
五月雨[illegible]の松風谷乃[illegible]
といふ句とうはく是ハこのふゆへありけ城とえんかし
[illegible]しことへしる真の句なるもといへり宗祇の歌
[illegible]風とあハをよられる柳かな
冬川の雪の柳や澄のいを
是らの句を引てこのよ多とへく真あるていしといふ
えりされハそいひいまを

うるはかれは秋風楽乃ことゝらず　貞徳
とゝなへし　[illegible]あはの内侍　季吟
箒木や　[illegible]の松の色　鷺水
こまつゝやそのこゝろひなるへれ

雅　八雲の抄にいはく雅は常しこゝ所といへり古今に
これはこゝのれとのなりしてしれを云し定家のいはく
雅は常ふるすとおもかゝるなくなく一とゝら
し始より終まくいひくれし雅は二つあり一には言雅
二には意雅し言雅とは詞にあらはしくをいふなり
なくよひし意雅とはんはなとくなことなるこれ

なく詞にとゝし鋭くせくて治定なれは面なことも
よんかしてうんをいふ也
春ゝ[illegible]いふとかりにやみよし雅の
やまとうれまくけさは人ゆらん
[illegible]いんはなとくなしく詞にとゝし鋭ひ
なり則とかつまやのやろ字と終はんらんの
字はさしかれてり是なん叶ゐれ所に清楠
のいはく毛詩に云言天下之事形四方之風謂
之雅雅正也政有小大故有小雅有大雅焉今案
に雅はまさしれに常しれに物にをなへれたとへとも

こゝぬし故に雅とてあれば宗祇のいへる
雅は賤に似たる仕やうなれば旅は政なれば吾恵とうを
をいへる雅は政とてしくありめにいふ也人教傍姫
雅の引ゐ

夏草の花の林にはあり

といふとしてしくたゝりいひたる句なれば詞人
をしてしくいふ雅の句をとのまへり宗雅はなりふ
ことなるこゝなるいふ義をとて

いけとこんにはすれば雪う浴霧
あけやまれんとや出てゆふ月よ

おもしいふ句を引寺あつりをいふ

風風をいくよのとけきをなり　貞徳

まさくかて在りあし雅まつり　季吟

日ゝに滅とかへよ又月の雨乃殺　鷲水

帝の句は先は年池西言水の雨に無しく稲
葉李洞の句を見らやうなひ結らん

頌　八やの雨りいぞく頌はいはひ詠を是は世紙なり
て神に告ふ也定家の云頌は神明に告ふ也
頌は又讃頌詠といふをありいひたるとよりあむる
ん也とをまさしく詞とさしあらはしく周公

神乃ちまることもあるや代々の家梅

といふを引て居りたまへ定家郷の所にて行家の祇

法師乃祝なるを叶ひ給ひやとて誹諧を宗

長の句れんりしたまひ侍る

信あるハ是を花梅さんきとくふ　貞徳

冥加あれか宿にあやめとふれ日生　季吟

拂ふ乱に神を見ゆるに誓うれ　鷺水

皆の説と引句のとりくにしたりて名乃義とあり

しらるべし口傳にいとくおよそ古義のうるち區なる

もいへども所在乃眞義ハ哥連誹とをふして風の

一字に籠つて侍るましんあらん人ハ偽

受まへきこゝにこゝ也

蝶と庵

聖和學園
短大
第 6589 號
受入
昭36. 3. 14